

# 危機管理と情報



## プロフィール 廣井 脩 ひろい おさむ

東京大学社会情報研究所長 教授  
昭和21年9月7日、群馬県沼田市生まれ。昭和50年東京大学大学院社会研究科博士課程を修了し、同年東京大学新聞研究所助手。昭和55年同助教授。平成4年東京大学社会情報研究所教授、平成11年から東京大学社会情報研究所長。日本災害情報学会会長、日本社会情報学会理事、日本自然災害学会理事、地域安全学会理事ほか、数々の要職に就く。

コストベネフィットの高い災害情報の重要性を説き、  
災害に楽観的で、運命論を信じるわたしたち日本人を、  
どのようにして危機管理という分野に目を向けさせるか、  
日夜研究され多方面で活躍されている  
廣井教授にお話をうかがいました。

前回の有珠山噴火が研究の原点ともいえ、  
北海道にはひとかたならぬ思があるようです。

## 人間の不合理な行動に 興味を持ちました

本日はよろしくお願いいたします。先生の専門的なご研究につきましては、論文などでいろいろ発表されておられますので、今回のインタビューでは少々視点を変えまして先生のお人柄にも触れていきたいと考えております。ところで東京大学大学院で社会学研究科博士課程を修了されていますが、社会学とはどんな学問なのでしょう。

廣井 わたしの専門は具体的に言いますと「社会心理学」で、大学では心理学、大学院では社会学を学びました。この社会心理学というのは、「こうすれば得だ」とか「これは自分にとって有利だ」と思いながらも、あえて不利な行動をとる、人間の不合理な行動についてどうやって解釈し理解するか、ということを中心に大きなテーマとしている学問です。では、どういう時に人間が不合理な行動をとるかといえますと、ひとつには災害時のパニック状態があげられます。昭和52年に有珠山が噴火し、虻田町の町民の方々が約1カ月の避難生活を余儀な



くされ、わたしは実際に災害の現場へ行くことになりました。そこで災害時の人間行動の調査を始めることになったわけです。いふならば有珠山の噴火がきっかけで、本格的に社会心理学を始めた

ので有珠山にはとても思い入れがあります。

**社会心理学の中にもいろいろなジャンルがあるのでしょか。**

**廣井** そうですね、例えばアメリカの生産過程で物を作る場合、いかに効率的に仕事をさせるかという学問があるんです。机の配置だとか、光の量をどれくらいにすればより効率があがるかという研究です。しかし、わたしはそういうことには全然興味を持ってなくて、むしろ本来ならAという行動をすべき人間が、なぜBという行動をするのか。そういうことを研究するほうが興味があったので、災害の研究に入りました。昭和53年に東海地震が注目されて、大規模地震対策特別措置法という法律ができ、その9条に警戒宣言という項目があります。東海地震が1、2日後に発生する危険性がきわめて高いという場合、内閣総理大臣が警戒宣言を出すという内容のもので、もちろん「マグニチュード8クラスの地震が間もなく起こる」、「静岡県には津波が襲ってくる」、「なんて言われたら大ショックですよ。しかし、予知が当たれば被害はものすごく減るわけです。津波や山崩れの危険性がある地域の人たちは避難するでしょうし、火を使うことだってやめるでしょう。地震予知というのは防災上、ものすごくメリットがあります。ただ命にかかわる情報なのでインパクトが強すぎるため、いかに防災効果を高め、デメリットを最小限にするかということが大事です。また、昭和53年の宮城県沖地震では都市地震の問題も表面化しました。有珠山の避難生活を目の当たりにし、今まで考えてこなかった問題がどんどん出てきた時期で、災害というものは研究に値すると考えるようになりました。

## 北海道は火山のハザードマップの先進地帯

**海外へも調査、研究に行かれる機会は多いのではないでしょか。**

**廣井** そうですね。興味深いのは、海外の人たちも人

間ですから基本的に考え方は変わらない。「自分のところに災害は起こらない」と考えるのが圧倒的です。また、「起こるかもしれないけど先のことだろうし、万が一起きてもわたしは大丈夫」という楽観視もある。正常化の偏見といいます。人には今日の生活が明日も、明後日も永遠に続くという思い込みというか、願望があるわけです。明日何か起こるといわれても、多くの人は「まさか」とか「本当かな」と言って緊急対処をしない。火災報知機が鳴っても何かの間違いだらうと思うのは世界共通です。

**事態を軽くみたいですからね。**

**廣井** しかし、それに加えて日本人には「災害は天災である」という独特の考え方があります。天災だからどんな防災対策をしても災害に遭う時は遭うんだ、自分が災害に遭って死ぬかどうかは運命なので、運命だからあまり夢中になって対策を立てる必要がないと考えます。こうした運命論とか天災論はアンケートをするとけっこう共感する人が多く、自然災害は天災だから誰のせいでもないという気持ちがあり、なかなか防災意識が高まりません。これを克服してどうしたら人々が危機意識を持つようになるのか、これが20年来のテーマのひとつです。

**そうすると、研究を始められたころと比べ災害に対する意識は変わってないということでしょか。**

**廣井** 残念ながら変わっていません。ただ、「人間は危険を無視するものだ」という考え方は防災の世界では浸透してきました。災害情報の重要性は、危険をいち早く察知して、危険だという情報を伝えて避難勧告を出せば、家や家財はダメになるかもしれないけれども、少なくとも人間の命は助かるわけです。究極の防災はハード面を充実することで、地震に強い家とか砂防ダムとか、防潮堤とかいろいろ対策はありますが、いかにせんそれではお金がかかりすぎます。災害情報を定着させ、上手に流して人的被害を防ぐということは、コストベネフィットからいっても非常にいいわけです。ひと昔前の行政は、避難勧告を出したら住民がパニックになるのでなるべく情報は流したくないという考え方でしたが、現在は危険だという情報はどんどん流すべきだというふうに変わってきました。また、ハザードマップも積極的に公開すべ





きだという意識を持つようになりましたね。

**以前、公開しなかった理由というのは。**

**廣井** ハザードマップは泥流がここまで流れてくるとか、河川ならどこまで水がくるとか、被害を想定しているの

で住民を不安に陥れるというのが一つの理由でした。また、土地の価格が下がるとか、こんなに危険なのにどうして行政は対策をとらないのかと批判されるなど、いろいろあったんです。北海道の火山については、ハザードマップ先進地帯といえるんじゃないでしょうか。

**こうして情報が公開されるようになり、また、インターネットを使うことで自ら危機管理を高めることもできるわけですね。**

**廣井** できます。パソコンが普及していますからホームページで必要な情報を探すことも可能な時代です。こうした流れを受けて、わたしが所長を務める東京大学社会情報研究所もインターネットを含め通信の分野にかかわる様々な研究をするようになりました。前身は新聞研究所といえます。戦前の新聞はただ国の方針を一方的に伝えるだけでしたが、戦後ヨーロッパやアメリカのジャーナリズムが入ってきたことで、それではいけない、市民の意見を汲み上げ、ときには行政を批判することも新聞の重要な役割だと考えるようになり、新聞の研究やジャーナリストの育成を目的に昭和24年に設立されました。以後マスコミ全般を研究するようになり、平成4年に現在の社会情報研究所に変わっています。

## 奥尻では町内会長さんが涙ながらに説明

**昨年の有珠山の噴火の際には先生も現地の調査にいらしゃってるそうですね。**

**廣井** 研究の出発点の場所でもありますからね、もちろん行きましたよ。そこでびっくりしたのが危機管理の体制です。わたしは火山予知連の臨時委員となり、伊達市役所の4階に置かれた政府の現地対策本部に案内されたんですが、そこにいるそうそうたるメンバーには正直驚きました。日本の危機管理のトップである安藤危機管理監、気象庁長官、副知事、国土庁の審議官とまさしく国の危機管理の中枢を担っているリーダー

がズラリと揃っているじゃありませんか。思わず九州で災害が起こったり、東京で何か発生したらどうするんだと心配になったぐらいです。阪神の震災以降、国の危機管理体制は根本的に変わったと実感しましたね。災害対策というのは、究極的な責任は地方自治体にあります。地方自治体は住民の生命と財産を守る義務があり、災害対策も地方自治体の仕事で、地方分権の精神にのっとっています。しかし、現実問題として、地方自治体だけでは対応できない、收拾がつかない場合だってあります。特に災害の影響が大きい場合は、国が積極的にというか、全面的に出る仕組みになったんです。

**危機管理のトップたちが集まるということは、復旧にもメリットがあるわけですね。**

**廣井** そうです。現地の情報が電話1本で中央官庁に行く、即決できる人間がいれば対応も非常に早くなるわけです。また、個人に必要な小さな情報はインターネットを使うことでいつでも得ることができ、災害時ににおいて有効な手段になったというのが有珠山での感想です。コミュニティFMも活躍し、情報をいろいろ活用できる時代になりました。先日「安芸灘地震」が起こり、テレビ放送よりインターネットのほうが細かい情報を流していたので、こちらも驚きましたね。インターネットならいつでも見たい時に見れるわけですから、メディアとして非常に重要なものだと思います。最近若い方を中心に携帯電話でメールを送っている姿をよく見かけますが、災害時にはかなり輻輳することが考えられ、果たしてどこまで利用が可能か分かりません。

**先生のご研究はフィールドワークもかなり多いのではないのでしょうか。**

**廣井** 災害直後の現地なんて誰も行きたくないでしょうが、それがわたしの研究です。まだ涙も乾いていないような被害者の方に話を聞くなんて、本当に辛くて、辛くて。以前、雲仙普賢岳へ災害の1カ月後に行き地域の方に集まってもらったんです。だんだん親しくなると、自分の甥が火砕流を吸い込んでしまい、そうすると肺が膨れてしまうので泣きながら棺桶に押し込んだとかね。でも、翌日会ったら「言いたいことが言えた」ということで被災後初めてカラオケに行ったそうで、今でも親しくお付き合いをさせていただいています。また、奥尻の



1993年北海道南西沖地震における奥尻町青苗5区の被害



1993年北海道南西沖地震における奥尻町青苗5区の被害

時も、町内会長さんには申し訳なかったのですが青苗地区の住宅地図を見ながら、どこのお宅の方がどういう状況で亡くなったか、避難行動を一緒に調べたわけです。彼はもう涙をポロポロ流しながら話すわけ

で、精神的にけっこうキツイですね。

**そうしたご研究が、これからの危機管理に役立っていきわけですね。**

**廣井** 例えば奥尻へ行った時、「島原の人は本当に気の毒に思ったけど、まさか自分のところにくるとは思わなかった」と言っていました。災害は対岸の火事ではないという意識を、もっと皆さんに持ってもらえるような仕組みができるよう、もうひとふんばり頑張らなければいけません。今までなかった分野ですから、獣道を歩いているような感じです。イヤな役割ですが、将来役に立つと思えば自分を奮い立たせることができますね。どうしてこの道に入ったかですって。それはやっぱり運命でしょう(笑)。人生なんてそんなものじゃないですか。明確には答えられないけれど、いろいろな岐路があって、たまたまこっちの道に進んでみようかなと、そして今があると。

**その獣道を、若い方も後ろからついてきて歩いてるわけですね。**

**廣井** はい。ただ水害の分野が少々弱いかもしれないので、それが課題です。

## 自然の怖さを知って 親しんでほしい

災害が起こるとハード的な復旧がクローズアップされますが、一人一人のメンタルケアもこれからは大事なのではないのでしょうか。

**廣井** そうですね、メンタルケアはとても大切だと思います。アメリカはそういう部分では大変進んでいて、阪神・淡路大震災の1年前、ノースリッジ地震がありちょうど海外研修でロサンゼルスにいました。あちらの放送局ではペットの面倒をみましょうとか、おびえている子供を抱きしめてあげましょうとか、そういうケアに関する内容が流されていて、日本でもメンタルケアをしなければという報告書を書きました。ただよそからぼっとやってきたボランティアが、家や家族を亡くした被災者を慰め

られるかという、それは難しいですね。専門の方を配置するなど心のケアも重要だと、やっと気づき始めたように思います。

**自然はわたしたちに豊かな恵みをもたらしてくれる反面、大変恐ろしいものであるということも、もう一度認識する必要がありますね。**

**廣井** 寺田寅彦の有名な言葉に「災害は忘れたところにやってくる」というのがあります。ただし、これは寺田寅彦の本には書かれておらず、ある時弟子に言ったことばだそうです。彼は「自然というのは、ある時は滋母(優しいお母さん)、ある時は子供を厳しく叱る厳父、その両面を持っているのだから、慈しみ、恐れなければいけない」ということを言っています。そこで困っているのが、昔は自宅の冷蔵庫なり何なりに食べ物を備蓄、あるいは買い置きをしていたので、災害が起こったとしても細々でも食べることができたんです。しかし、今はコンビニがあるので、おなかがすけばいつでも食べられる状態なので、家庭の備蓄が減っています。特に若い層が顕著ですね。コンビニは平常時のニーズに合わせて製造、流通しているので、イザという時に食べ物があるわけではありません。また、オートキャンプなどが人気でアウトドアブームのようですが、自然の怖さを知って自然と親しんでほしいですね。とにかく皆さん一人一人が「まさか」ではなく、「もしかしたら起こるかもしれない」という気持ちを持つようにして、運を天に任せるのではなく、またインターネットなどを活用し、危機意識を高めていってほしいと考えます。

**本日は長い時間にわたり貴重なお話をありがとうございました。**



空から見た平成12年有珠噴火